

氏名	松本仁助 まつもと に すけ
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第130号
学位授与の日付	昭和54年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	「オデュッセイア」研究

論文調査委員 (主査) 教授 松平千秋 教授 藤沢令夫 教授 清水純一

論文内容の要旨

本論文はA (a b) B (a b c) C (a b) の三部より成り、Bにおいてはさらにaが1.2.3.4, bが1.2.3.4, cが1.2.3.4.5に細分される。巻末には参考文献の目録を掲げる。

第一部Aは「神々の怒り」と題され、まずトロイア戦後帰国するギリシア軍、ことにオデュッセウス(以下O.)一行が、ゼウス、アテネ、ポセイドン、ヘリオスら諸神の怒りを買ひ、O. は結局辛うじて単身帰国する事情を1—13歌にわたり検討する。神々の怒りは人間たちの神を恐れぬ無法な行為(atasthaliai)に起因するものであり、その所罰を求める動議が神々の会議にかけられ、ゼウスの承認を得て実行される。元来、O. に好意をもつアテネの怒りが、O. の蒙る災厄の前半部分の原因となっているのは一見奇異に思われるが、これは小アイアスの犯した不敬行為にO. や他のギリシア軍将兵が連座したと解すればよい。しかしマレイア岬以後のO. 一行の漂泊はO. 自身の行為に起因する。即ちポリュペモスの明を奪ったことが彼の父ポセイドンを憤激させたのであるが、その行為自体はやむを得ぬものであったとはいえ、勝利に倣って自分の名を明したために要らざる危難を招くことになったのである。しかしこれは無法な行為(アタスタリア)というよりも、むしろ過失(ハマルティア)というべきであり、さればこそO. は多大の犠牲を払いながらも死を免れることができた、と著者は説く。他方O. の従者らの破滅が彼等の無法な行為によることは、O. 自身の語る漂流談に述べられている通りである。

ついで、著者は、ペネロペイアの求婚者たちに対するゼウスとアテネの怒りについて、1—2, 4—5, 13—22歌にわたって検討する。O. が求婚者たちを誅戮したのはアテネの指示に基くものであるが、アテネが求婚者を憎む根拠について、分析論者のみならず、統一論の立場をとる学者の間にもさまざまな解釈がある。著者は諸説を比較検討した上で次のように結論する。求婚者たちの破滅は2歌におけるイタカ人の集会以前において既に神々の間で決定されていたと見るべきであり、要するに彼等は正常な手続きを踏まずに夫を待つペネロペイアに言い寄り、意に従わぬ彼女の館で無法の限りを尽したアタスタリアによって、アテネ、ひいてはゼウスの怒りを買ったのである。アタスタリアが神々の憤激を招き、その結果自滅するというパターンは、O. の従者たちの場合も、求婚者たちの場合も同一である。

B「オデュッセイアの筋の展開」においては、「テレマコス物語」「パイアクス物語」「O.の帰国」を順次取扱い、「ネキユイア」に関する考察を挿んでいる。

「テレマコス物語」については、1—4および15歌にわたり、テレマコスの行動を中心に検討し、1歌において述べられるアテネ・忠告には前後に矛盾があるとする分析論の側からの批判に答える。ついでテレマコスのピュロス、スパルタ訪問について、ネストルとメネラオスの発言に関する分析論者の批判に反論し、アテネの忠告との関連において、そこになんら矛盾の存在せぬことを説き、さらにテレマコスの帰路の旅程について詳細な考察を試みている。

「パイアクス物語」については、5—13歌にわたって、O.のオギュギア出発、スケリア到着と滞在、故国への出発を扱う。ここでは2歌に語られる第二の神々の会議に関する分析論の批判を却けて、それは1—4歌を前提する筋の運びとして、極めて自然な進行であると論ずる。さらに王妃アレテとの対話、デモドコスの語る木馬の計略の物語を聞いてはじめて己れの素姓を明す条り、スケリア滞在期間の延長等、従来分析論者の好餌となった諸点について、統一論の立場から反駁する。「パイアクス物語」も「テレマコス物語」と同様、本来独立した小叙事詩が機械的に挿入されたものではなく、前後に矛盾はなく全篇の中に渾然として融合しているという。

最後に「O.の帰国」であるが、はじめ乞食に身をやつしたO.が、妻にすらその正体を秘し、求婚者たちの侮辱にも耐えた末悪人どもを討ち、妻との再会を果す。ついで田園に住む老父を訪ねた後、求婚者の遺族との対決、アテネによる両者の和解に至るまでの物語を13—24歌にわたって考察する。その間、広間の武器隠し、足洗いの場、弓競技等、分析派から批判を蒙っている諸点について、それらがいずれも13歌のアテネの指示と、16歌の殺害計画に従ったO.の行動の進展の線に沿ったもので矛盾はなく、また筋の展開を損ねる要素の介在せぬことを論証する。23歌のペネロペイアによるO.再認の場も、古来多くの学者の批判の的となったところであるが、多年の心労によって頑に閉ざされた王妃の心が次第に開かれてゆく心理的過程を見事に描いたものと評価される。23歌297行以下の結尾は、アリスタルコス、アリストパネスら古代の碩学によって真正ならざる部分と判定されたのであるが、著者はオデュッセイア全篇の構想に照して考察すれば、これもまたオデュッセイアにとって不可欠の部分であるとの見解を示す。

C「オデュッセイアの成立」において著者は、まずオデュッセイアがイリアスとともに口承（誦）詩としての特性を示すところから、両詩ともに素材ならびに文体の上で、極めて長い伝統に根差しており、作者はおそらく文字を用いず純粹に口頭で作詩したものであろう、とする。口承詩の作者たちは、文字の使用に慣れた人間には想像を絶する記憶力とともに独特の創作力を持つものであることは、他民族の口承詩において証明されている。ホメロスの叙事詩は前8世紀中葉から同世紀末までに今日の形態を具えたと思われるが、おそらく前6世紀中頃まではほとんど口頭で伝承され、やがて文字の使用によって最終的に固定したものであろうと説く。

オデュッセイアの作者についての著者の見解は以下の如くである。イリアスとオデュッセイア両詩の間には、もちろん多くの共通点があるが、相違する点も少ない。最も顕著な相違点として、イリアスは名誉のためには生よりも死を選ぶことが英雄の美德とされ、アキレウスの悲愴な運命が強調され美化されるが、オデュッセイアでは死よりも生を讃美する傾向が強く現われている。また前述した如く、人間は神をおそ

れぬ無法な行為（アタスタリア）によって神の怒りを招き、神罰を蒙って没落するという観念が、倫理的基調としてオデュッセイア全篇を貫いている。以上の考察から著者は、オデュッセイアの作者はイリアスの作者の門下から出た一ラプソードスではないかと推定している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、徹底した統一論の立場から、『オデュッセイア』（以下 Od.）全篇が単一のラプソードスの作品であることを論証せんとした、野心的労作である。

論文は3部（ABC）より成るが、第2部（B）において、著者はキルヒホフ以後現在に至るまでの代表的な分析派の諸家によって指摘された問題点を逐一とり上げ、原典に即して反論を加えつつ、著者独自の統一論的解釈を展開している。全24歌、一万数千行に及ぶ Od. 全篇にわたって詳細な検討が加えられており、著者が最も努力を傾注した部分と見られる。著者の主張がすべて首肯しうるものであるとはいえないが、著者独特の発想に基く注目すべき見解も各所に見出される。いわゆる「テレマコス物語」において、「アテネの忠告」には前後に矛盾があるとする、多数有力な分析論的批判に対し、著者は「テレマコス物語」全体を一種の「教養小説 Bildungsroman」とする立場から、巧みな説明によって分析派のいわゆる「矛盾」や「不自然さ」を解消する。また帰国後の事件における一連の問題点——足洗い、弓競技等々——に関する分析派からの批判に対して、これらはいずれも13歌のアテネの指示と、16歌の殺害計画に従ったオデュッセウスの行動の線に沿って考察すれば、そこにはなんら矛盾はなく、筋の展開を損うこともない、とする著者の説明もうなずける。またオデュッセウスとベネロペイアの再認に至るまでに両者の間に生起する心理的葛藤についての解釈も、批判者側の多分に機械的な分析に比して、著者の見解には柔軟性があり、より文学的な把握であるといえる。

しかし分析派による批判に一々反論することが、直ちに統一論的解釈を全面的に是認することにはならないであろう。統一論の立場を確立するためには、先ずその拠って立つ文学批判や美的判断の基準を明確にするなど、さらに積極的な操作を必要とする。第一部（A）第三部（C）はそのような意図をもって執筆されたものと解されるが、AおよびCにおける著者の論述は簡略に過ぎ、かつ学界においてすでに定説化した学説の紹介にすぎぬ個所も少なくなく、第二部（B）における詳細な検討に比して物足りぬ感を免れない。ただ、第一部において著者が Od. においてしばしば用いられているアタスタリア（atasthalia）なる語に着目し、「神を恐れざる無法な行為」を意味するこの語が、Od. 全篇にとって一種のキー・ワードの役を果しているとする見解は注目に値する。人間は無法な瀆神の行為によって神の怒りを招き没落する。他方、敬神の心のあつい人間は、たとえ多くの禍難を蒙ろうとも、遂には神の加護にあずかることができる、という（作者の）信念が Od. の倫理的基盤を成す、と著者は説く。それが著者のいうように、Od. の作者とイリアスの作者との思想的相違をしめす示標とまで考えてよいかどうかは疑問であるが、興味ある指摘ではある。

本論文において示された著者の徹底した統一論の立場は、ホメロス研究の現状からすれば、余りにも素朴な、時代錯誤ともいふべき態度であるとの批判を蒙る恐れは多分にある。しかし著者の真意は、一見極端とも思われる統一論の立場から分析論と対決すると同時に、統一論的解釈の限界をも併せて示唆する

ことにあったと察せられる。いわば、初心に帰ってホメロス問題を見直す、ということである。その意味において本論文は極めて意欲的で興味ある一実験であるといってよい。本論文が著者の多年にわたる Od. 研究の実績を示す労作であることは疑いなく、わが国のホメロス研究に寄与する所少しとしない。今後の著者に期待したいのは、分析論的ホメロス批判に対して、論理的、心理的解釈を通じて反論するにとどまらず、新分析論や口頭詩の分野における研究の成果をもとり入れて、一層柔軟な態度で多角的に統一論を展開することである。

以上審査したところにより、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。